

司馬遼太郎

と

藤沢周平

「歴史と人間」をどう読むか

佐高信

司馬遼太郎と
藤沢周平

佐高信

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただきます。このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽一―一六―六

(〒112-8011)

光文社 図書編集部

し ばりようた ろう ふじさわしゆうへい
司馬遼太郎と藤沢周平 「歴史と人間」をどう読むか

1999年6月30日 初版1刷発行

著者	佐高信
発行者	森元順司
印刷所	公和図書
製本所	ナショナル製本

発行所 東京都文京区音羽1 株式会社 光文社
振替 00160-3-115347

電話 編集部 03(5395)8172
販売部 03(5395)8112
業務部 03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。

© Makoto Sataka 1999

ISBN4-334-97223-3

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、日本複製権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

司馬遼太郎と藤沢周平

——
佐高
信

司馬遼太郎と藤沢周平

—
目次

(1) 「上からの視点」と「市井しせいに生きる」…………… 12

司馬遼太郎が読めなくなる

「将」ではなく「兵」が支えた日本

司馬遼太郎が小説を書かなくなった理由

悪人を書かない「人間観の浅さ」

名もない市民を教え子に持つ誇り

(2) 同じ人物・「清河八郎きよかわはちろう」をどう描いたか…………… 37

司馬の清河八郎像に対する藤沢の抗議!?

ものかきは「無位無冠の浪人」ではないのか

志を失うことができない苦衷くちゆう

「名もない者を描く」のか、「名のある者を描く」のか

「女の眼」を書かなかった司馬

「あったかそうで、冷たい人」と「とっつきにくそうで、あったかい人」

司馬は何を見て、何を見なかったのか

働くことを喜び、労働を尊敬する

兩者への違和感と疑問

(1) 司馬遼太郎の避けた問題…………… 64

最も厄介な問題を無視

愚かなるエスタブリッシュメントを安心させる

善意の人には根本問題が見えない

英雄史観の危険な側面

司馬遼太郎の小説は『弔辞小説』

あらゆる歴史を理解可能なものとして描き出す

大岡昇平の司馬批判

見ようとしながゆえに見えなくなった

(2) 藤沢周平への唯一の疑問…………… 93

故郷の名誉市民を拒否

「胸像なんて晒者」

同郷の歌人・斎藤茂吉の戦争責任を厳しく追及

小説家、歌人の戦争責任

同郷ということと石原莞爾いしはらかんじに甘くなった

第三章

藤沢周平の心性しんせい

石原に予見能力はあったのか
権威はすべて張り子の虎

(1) 農民の血と詩人の血……120

ながつみたかし
長塚節を書くことで自分を書いた

教師時代に行なった生徒と二人だけの「授業」

有名作家になっても変わらぬ師弟関係

山形の農民詩人・真壁仁まかべしん

教師になれなかった同級生への「うしろめたい」気持ち

(2) 心に「狼」を棲すまわせていた男——『市塵』・新井白石論……139

動物園でパンダを見てもしようがない

黙々と生きる

政治家たる者、まず畏れを知れ

俗にまみれて俗に染まらず

俗にまみれた業界紙の記者時代

第四章

司馬遼太郎をどう評価するか

『市塵』に示された「バブル経済」批判
リーダーにとって真の「覚悟」とは何か
「藤沢の中の白石」と「白石の中の藤沢」

(1) 「自由主義史観」と「司馬史観」

石川好対談

158

世界に通用しない「愛国心」

司馬遼太郎の価値観

国民作家としての反省

現代の「坂本竜馬」探し

国家観と戦争体験

(2) 歴史のうねりを描くとは

色川大吉対談

173

高度経済成長に悼^{ささ}さした作家

司馬と大岡の対立する視点

薄っぺらで、まるで紙芝居

普遍的問題への掘り下げ

第五章

藤沢周平をこう読む

明るい明治と暗い昭和
天皇と側近、司馬と読者
歴史小説で歴史を知ったつもりになる
歴史小説と歴史叙述の違い
日本の歴史家がもう少ししっかりしていれば
不景気の中で司馬は一層受ける

(1) 俳句に込められた文学と故郷の風景……………204

療養生活に入ってから俳句をつくりだす
暗さが身にしみる
郷里はつらい土地でもある

(2) 苦界くがいに身を沈めた経験……………220

市井の働く人を書く
“聖職者”から“苦界”への落差
業界紙記者時代に書いた伝記

宮部みゆき対談……………220

世の中の理不尽への憤り

それぞれの人生を肯定

暗い苦しい過去があったからこそ……

本当の「癒やし」とは……

白石にみる政治家たるべき姿

内からのものを呼び覚ます力

あとがき
263

初出一覧
266

著者写真撮影

装幀

大竹左紀斗

菊池

一郎

第一章 両者の違い

(1) 「上からの視点」と「市井しせいに生きる」

司馬遼太郎が読めなくなる

一九八二年秋、第一勸業銀行シンガポール支店で為替投機の失敗によって九十七億円にのぼる損失を出し、解雇された同支店資金課長の神田晴夫は、それから六年後の八八年十月、冒ガンのため、四十七歳で亡くなった。ロンドンという異郷の地で迎えた死である。

かつては、男らしさに惹かれ、司馬遼太郎の作品を愛読した神田だったが、解雇され、さらに三男を病気で亡くすという不幸に見舞われてからは、山本周五郎の作品をむさぼるように読んでいたという。おそらく、山本周五郎の後継者といわれる藤沢周平の小説も耽読たんどくしていたにちがいない。

加藤仁の『デイリーリングルーム25時』（講談社文庫・原題『「円」の戦士』）のなかで、神田の

友人がこう言っている。

「能力主義の外資系企業に比べると、終身雇用の日系企業は、ある日突然お払い箱にならず、身の危険はなく勤務できるといわれてきたが、果たしてどうでしょうか。神田さんの例をもちだすまでもなく、たった一回の失敗によって、サラリーマンとしての生命を断たれることもある」

神田のように、司馬遼太郎から山本周五郎、あるいは藤沢周平へという変換はあるのだろう。しかし、その逆はないのではないか。

たぶん、同じようなコースをたどったと思われる人に、高杉良の『懲戒解雇』（講談社文庫）の主人公のモデル、所沢仁がいる。

三菱油化（現・三菱化学）のエリート課長で、社長表彰を受けたこともある所沢は、首脳陣の派閥争いのあおりを食って解雇されそうになり、地位保全の訴えを起こす。前代未聞の事件だった。

所沢が会社を訴えて、翌朝、出社すると、所沢の机の上には女子社員たちからの花束がいまにもこぼれ落ちんばかりに置かれていた。新聞にも大きく書きたてられ、さすがに会社へ来るのは気が重かっただけに、所沢は胸が熱くなった。

その後も、彼女たちはいろいろな情報を提供してくれたし、女子社員たちだけでなく、見も

知らぬ男性社員も励ましてくれた。

「会社ってこんな人もいてやっていたんだな」

そのとき、所沢はこう思った。会社を訴えるようなことにならなかつたら、エリートとして先頭を突っ走ってきた自分は、こうした人たちの存在に生涯気づくことがなかつただろう。

軒を出て狗寒月に照らされる

藤沢周平にこんな句がある。藤沢の眼は人だけでなく、犬にまで及ぶ。

藤沢は、時代小説の中で、自分は山本周五郎とともに「多分人生派とでもいったところに分類されそうな気がする」と書いている。そして「親戚のように身近なひと」である山本の作品と自分のそれが似ていると言われることについて、

《そう言われたことにやはり無関心ではいられなくて、いつかはそこところに何らかの筋道をつけて納得したいという気持があった。しかし、そう思いながらじつは筋道をつける何の努力もしていないので、周五郎さんについて何か書けと言われると、まるでまだやっていない宿題を提出しろと言われたように、異様にあわてふためいて、とにかく何か書かなければと思っ